

はじめに——『未来のイヴ』を読みなおす

福田裕大

『未来のイヴ』のアクチュアリティ

本書の対象となる『未来のイヴ』は、十九世紀後半のフランスで活躍したヴィリエ・ド・リラダンの小説作品である。本書の表題に「読みなおす」という言葉を用いていることからも分かる通り、未知の作品などではまったくなく、むしろ、十九世紀のフランスで生み出された小説作品としてはかなり読まれてきた部類のものだといつていい。

大筋としては、ちょうど作品が構想されようとしていた頃にヨーロッパへとその名を轟かせようとしていたアメリカの発明家、トーマス・アルヴァ・エジソンを作中へと大胆に召喚し、この科学者と英國貴族エワルド卿との対話を通じて、前代未聞の人造人間製造計画の実態を少しずつ明らかにしていこうとする物語である。しばしばいわれる通り、作品のそこそこにあからさまな女性蔑視的言説が含まれていることは事実だし、物語の根幹となる人造人間製造の経緯にしても、現代的な感覚からすると気軽に受け止めることは難しい。美貌の女性の外見

のみを再現した機械的身体を作り出し、そのなかに当の女性のものとは異なるよりよい精神を吹き込むことで、理想の女性を作り出す、というのが物語の主題であるが（作者によると、人造人間につけられた「ハダリ」）といふ名は、ペルシア語で「理想の」を意味するらしい）、こうした設定を前にして、現代の読み手の多くはきっと眉を顰めることだろう。

けれども、以下に詳述するような「科学の時代」のまつただなかで、機械的に製造された擬似人間という形象をいち早く創出し、それと生身の人間が接することの不安をラディカルに描き出したことの意義は大きく、私たちは同書がもつこうした意味でのボテンシャルと改めて向き合ってみたい。『未来のイヴ』という物語の原型が構想され始めたのは一八七八年ごろで、そこからさまざまな糺余曲折を経て作品が完成に至るのが一八八六年、どちらを取るにしても、こんにちとのあいだにはおおよそ百五十年の隔たりがある。にもかかわらず、この作品から届けられる歴史的な声のなかには、二十一世紀を生きる私たちが抱え込んでいる現代的な不安のありようを浮かび上がさせてくれるような不思議なアクチュアリティが秘められている。

そもそも、『イヴ』——以下、煩雜さを避けるために適宜この略称を用いることとする——が書かれた十九世紀後半のヨーロッパは、「科学」という新興の知が、人々の日常的な暮らしや、それを根本で支えているパラダイムを決定的なしかたで変容させようとしている時代だった。汽車がひとを運び、空には気球が、街には灯りが——といったことはいうに及ばず、例えば写真や録音技術といった新種のテクノロジーが発明されて、人々がそれまでこうと信じ込んでいた感覚・感性が、瞬く間に刷新されてしまう（例えば、音や声が「生み出されるや否や消えてしまうもの」ではなくなってしまう）。のみならず、そんな強大な知の波が、ほかならぬ人間の身体までをも対象化しようとするときに、それまで信じられていた——大きくいうと、キリスト教的な——正しさが搖るがされ、次第に不確かなものへとその立場を変えていく。実際、解剖や機械的計測、果てには人体（動物）実験などを通じてなされた客観的な観察が、人間身体の内実を正確に解明していくとき、「魂」や「理性」、あるいは

は「生氣」でもかまわない——そうしたかつての正しさ、人々がかつて自らの存在の根拠のようなものと信じていた概念たちは、いったいどうなつてしまふのだろう。

『未来的イヴ』という作品は、科学という知がこのようなかたちで当時のヨーロッパの社会にもたらした熱狂と不安とを、ともに吸い込むようにして書かれている。科学の力によつて日夜もたらされる新たな進歩の驚きが、結果的に人間という存在のあり方までをも根本から搖るがせてしまうような時代を生きること——。この物語のなかに登場する「ハダリー」というアンドロイドは、まさにそうした生につきまとう不安を形象化するかのようにして描き出されているわけだが、ここに述べたような不安は、『未来的イヴ』という物語が書かれた百五十年前よりも、むしろ二十一世紀を迎えたこんにちにおいてこそ、その強度をいつそう増しているように思われる。『イヴ』という作品に現代にも通ずるアクチュアリティがあると先ほど書いたのは、まさにこうした意味においてのことだ。

實際、現代社会で活躍する創作者たちは『未来的イヴ』という作品のもつポテンシャルに極めて敏感で、同作を想像力の端緒にするよくなかたちで優れた作品を世に問うてきた。士郎政宗のマンガ作品を原案にした押井守のアニメ映画作品『イノセンス』はその最たる例であるし、惜しくも早世した伊藤計劃が遺した『屍者の帝国』（円城塔との「共作」）にも、『イヴ』の痕跡がはつきりと認められる。あるいは、音楽の世界へとさらに視野を広げてみると、テクノ・ポップ・ユニットのALI PROJECTは二〇〇三年にその名の通りの〈未来的イヴ〉という楽曲を生み出しているし、近年では〈*ハロー・プラネット〉等の楽曲で知られるボカラP（ボーカロイドを用いた音楽家）のsasakure.Ukが、「初音ミク」を見事にフィーチャーした作品——その名も〈フューチャー・イヴ〉——を発表したことなどが記憶に新しい。

いずれのものも、上述したような時代の揺らぎを鋭敏に察知したうえで、現代社会に生きる人間の不安——とりわけ、自らの存在の基盤や他者とのつながりの不確かさ——を鮮やかに切り出した重要な表現であるといえる

だろう。すべての作品の詳細に降りていくことは無論できないのだが、例えば最新の作品である「フューチャー・イヴ」の歌詞のうえには、「未来的イヴ」という作品のエッセンスを文字通り浮き彫りにするかのような鮮烈な表現が溢れている。実際、終盤近くに置かれた「虚無でもいいよ／闇でもいいよ／夢が、まだ“夢”が愛せるなら」というフレーズが、実在しないアイドル「初音ミク」の姿を通じて歌われるそのさまは、「イヴ」という作品にすでに親しんだ読み手たちにも、きっと鋭い衝撃を突きつけることだろう。

作家ヴィリエをめぐるクリシェ

一方で、「イヴ」という作品の批評を真に担うべきであるフランス文学研究の世界はどうだったか。冒頭でも述べた通り、そもそも「未來のイヴ」は、フランスの文学に関心をもつ人々のあいだでは相當に知られた作品である。しかしながらこちらの世界では、同作が世に広められ、一定の評価を得ていくプロセスのさなかである種のバイアスのようなものが生み出されており、その結果として、こんにちの創作者たちが「イヴ」に見出してきたようなアクチュアリティが十分なしかたで語られようとはしていない。

ヴィリエという作家は、遠く十字軍の時代にまで遡りうる貴族の家系の生まれであることを自ら任じた人物である⁽¹⁾。そうした気高い出自を有し、なおかつ、誰もが疑わぬ溢れんばかりの才能を誇った人物が、しかしながら俗世においては徹底した無理解にさらされ、悲惨なまでの窮屈のなか、それでも自身の目指す文学の実現に身を捧げていく——。こうした強烈な、あるいは切実なまでの対照性ゆえのことか、ヴィリエ・ド・リラダンという作家をめぐる言説は、「理想」と「現実」の二分法にもとづいた論理によつてこの作家を語ることを常態化させてきた。例えば、ほぼ同年代で無二の親友でもあったマラルメによる追悼文や、少し若い世代に属する象徴主義詩人・作家たちによる言説がそうであるし（例えばレミ・ド・グールモンのもの⁽²⁾）、あるいはすこし後の時代に

なつて、シュルレアリスムの代表格たるアンドレ・ブルトンが『黒いユーモア選集』に収めた短文なども、やはりそうした神話化に寄与するところが大きいものだ。

誤解のないよう述べておけば、ここに例示したテクストのひとつはいずれも素晴らしく強靭で、ヴィリエという作家、ならびに『イヴ』という作品を考えるうえで、いまなお極めて多くのことを教えてくれる。しかししながら、これらのテクストが後の世の批評や学術研究のうえで反復され、一般化されていく過程のなかで、はつきりとした硬直化現象が生じてしまったことも事実である。上述した書き手たちが無自覚に取り入れていた前提のようなものがいつしか自明視され、ついには後世の論者たちの手のもとで疑う余地のない読みの枠組みを作り出してしまった——そうした事態のことだ。

実際、ひと昔前のフランス文学史やヴィリエ論を紐解いてみると、この作家には定型化されたレッテルが貼られていることが多い。最大公約数的に述べるならば、「西洋近代の進歩を支えた俗世の諸要素を憎み（ないしそれを嘲弄し）、自らの文学創造を通じて理想世界への飛翔を試みた作家」といったところになるだろうか。そのようにして「俗世」と「理想」をめぐるあからさまな優劣の二分法を打ち立てたのちに、文学に仇なす敵性を孕んだ諸要素が前者の項目へと次々に代入されていくわけだ。例えば、近代ヨーロッパの「進歩」を支えた「功利主義」や「物質主義」、さらにはそうした傾向を体現して肥大化した「ブルジョワ」たち。のみならず、そうした実利的社会の原動力となつた様々な知もやはり、槍玉にあげられることになる。「産業」や「技術」はもちろのこと、これまでに生み出されてきたヴィリエ論にとつて、なにより「科学」という知こそが、その種の（憎むべき）俗世の知を象徴するものだった。

「反『科学』」の陥穽

ヴィリエ・ド・リラダンという作家、ならびに『未来のイヴ』という作品をめぐる従来の言説の多くは、まさにこうした論法によつて、科学という知をさながら文学創造にとっての対蹠点をなすものとして、極めて悪しざまに扱つてきた。けれども、本当にそうなのだろうか。

例えば、実際に『未来のイヴ』というテクストを読み進めていくと、同作の言葉の大半を構成しているものが、圧倒的な量の科学的言説であることに否応なく気付かされる。冒頭に置かれたエジソンによる長大な独り語りに始まり、作品そのものの大部分をなしているエジソンとエワルドの果てのない対話をかたち作つているのも、人造人間のなりたちをめぐる科学的問答だ。それに加えて、舞台となるメンロー・パークの研究所にしつらえられた数々のギミックや、さりげなく、しかし重要なしかたで物語の「背景」を織りなしている雑談めいた科白のなかにも、当世の事情にかなり通じていないと書けそうにないものが多い数ある。

テクストそのものが示しているこの現実、すなわち、科学という領野についてのこうした圧倒的なまでの情報量と、私たちはいつたどのようにして向き合えばよいのだろう。ヴィリエにとつてはそれすらも「風刺」や「冷笑」の身振りなのだ、などと言い切ることはなるほど簡単である。けれども、そうした断定に迷いなく踏み込んでしまったその瞬間に、私たち読み手はおのずからひとつ読みの身振りに巻き込まれ、「イヴ」における科学的言説のすべてを枝葉末節に過ぎぬものとして片付けてしまうことになる。そのような態度が、上述したような「イヴ」というテクストの現実にどこまで感應しうるのか、私たちは真摯に問わねばならない。

もちろん私たちは、従来の態度をただ単純に反転させて、「『未来のイヴ』という作品は科学的な（＝時代の科学を描出することを志向した）テクストなのだ」と主張したいわけではない。ここで行った一連の指摘を通じて